和田定節編輯
開明小說
春雨文庫
第六號
上

A448
11

梅亭金鶩閲

和田定節編輯

開明小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

48-7543

緒言

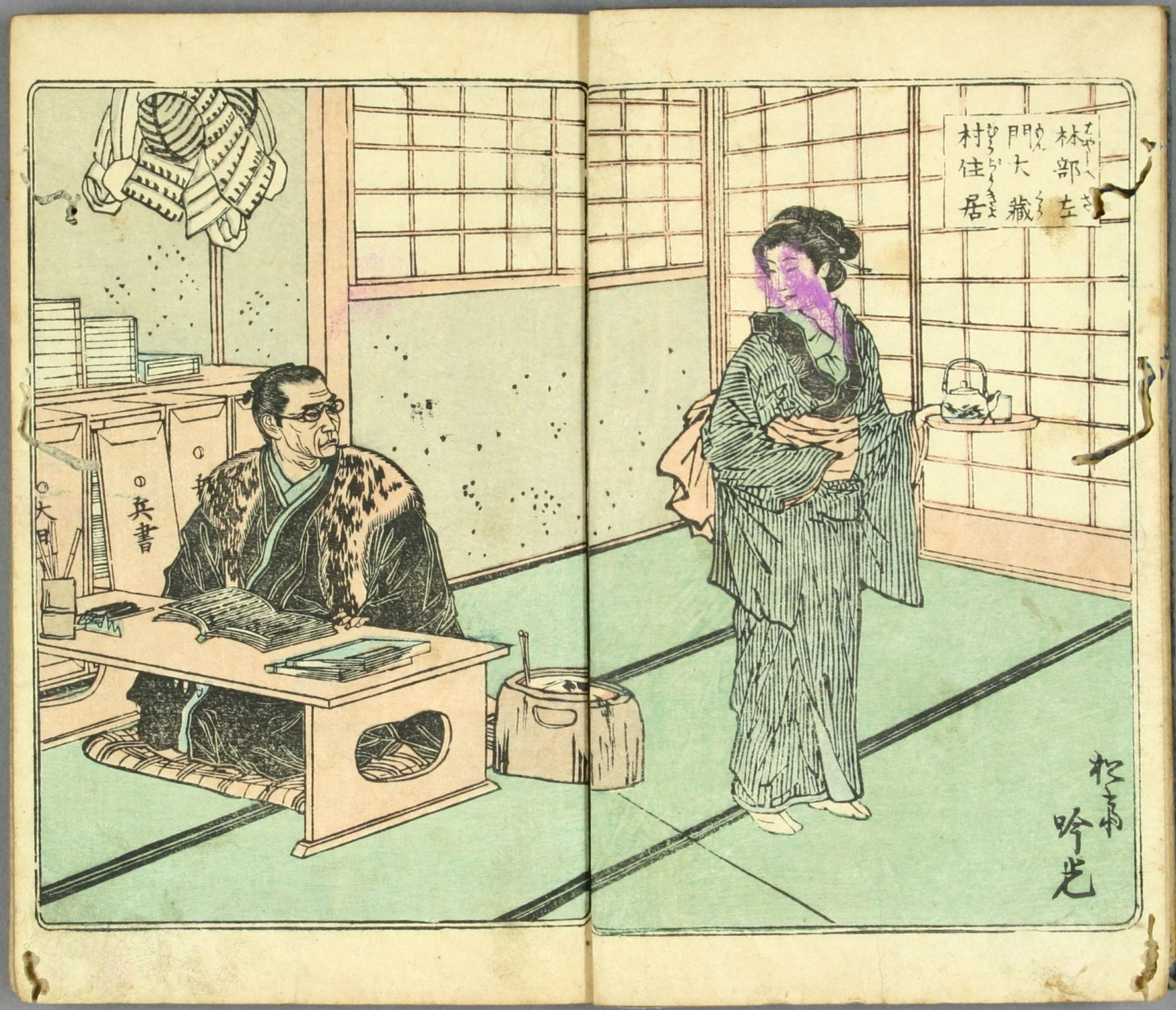
今や文明の秋開化進歩に連らなる蒸汽車ヤ汽船を始し如く人力車ヤ馬車代と はづこ一如く郵便脚夫の時間ヤ おくれしが如くなれば諸般の論説日々追て新なる中ゑ男女同権てふを唱へ出せるハ西洋風の事柔術流より出るとは

なり。茲に掘り出でし同穴と同墓とは、男子と年べて近世の義女貞女孝女の類ひと挙て、春雨文庫の寶物と做んとし、既に第六編室りぬ。然ハあれども女子を男子の伴きと異にして、其行ひ皆内に在りて表に現ハすこと少きが故に、美事善行とてども人の知ること稀なり。因て其記載する様に之

しけれど、一編毎に稿の後に小巻しを繰て、登兒の期に違ふ。元来女子に文なるを以て自ら粗いの責しを免るものと待許しあらんを希ふ

江東の偶夫

篠田散人誌


林部左門大藏
村居
兵書
松南吟光

こつぱし乞ひ
小常芝居
ぢやや
茶屋みさく
ぢうまつづ
涼の圖

春雨文庫第六編巻之上

東京　和田定節　著

○第二十一回

諸侯諸浪士勤王黨西國より駈付る藩士あれば関東より走上る幕臣ありて京師い日ふ増す混雑の機會ふ乗ド儲と得んとて國々よりも入り來る商人仲間職工連ふ四條通りの賑をひい何時ふも覚えぬ程るゝき然れど旅籠屋料理茶屋

食物見世ハ取り分て人の出這り多き中ハ此處ハ下等の料理店酒ハ五夕を辞そるを無く飯ハ半人前をも厭ハず胡座立膝片袒ぎ君と呼あり僕と言ふあり八公あれを熊公なりて代る銚子ハ扣く手の最騒ぐしき片隅ハ鍋を掛さる火鉢とべ膝と膝との間ハ居え外ハ一二種の肴を並べ早十分ハ酔さるゥ小さる声ハ成るゥと思ふと又忽ちハ大声揚げ話しなぐゥハ酒飲を居るハ桝屋寅吉と同一道具屋仲間なる百足や三八と言ふ者ハて三八ハ寅吉の持一盃へ酒を次るがら「夫りやァ寅さんの手際ハ右ちやァ間鈍かつて打物ガラリと投棄て去来や組んと捻ぢ倒し取て押へると言ふ烈しい所ぐ有りさうる物ぢやァ袖へゥ向ふの苗字の様ハ横田ハ右つ轉じ悴の思ひハ於岩とも徹すと遣らかしく仕舞さら宜らゥ。ハ寅「ヘン麥畑で田舎娘と口説やァ右めへ

左様往日のう待宵ふ更ちく鐘の声きけば飽ぬ
別れの鶏いりのうん成程さんざ樂しんざ後ざか
ら待ぶうけと食ひ更ちく夜の鐘の音と算へく
居るからえりやア別れの鶏い何でも無らうサ然ざ
其別れの鶏更ちく鐘よりも憂路ふ取ての仇敵
意地ゑる根生の平で無しと言ふのい人目の関
と言ふ奴夫して其関の役人と唱ふる者い第一
番ざ下女のお初ふ妹のお楽次ざ清兵衛の慈母

とこ供二人りさ相對で半日も居る様る事ざ有り
やア女の方で此方と捻伏て仕まふのざア畢竟男の
熱くみると言ふりのい女ざ水と向け焚附るから
の事往昔ッから女ふ氣の移へ色事の出來と例い
まア聞ねへ夫ざけれども北野の境内の待ぶせるん
ぞと言ふるア夜で見ると麥畑の畫間よりい四邊ざ
安心ざらう天の岩戸のお扉までみん往ずとも山
葵醤油ちちよろと酸味噌でお刺身ざうみの御

馳走ハ當然の事ぢヤア裕くり寅〈そこゐ人ッの不思
儀ありで今も話ーと通り三晩も素矢とーと訳
どから此處ぞと一番息ごんでお岩のてを取ると
お岩も此方のてと摑ッとから初心らしく胸ガ悔とう
何とうで心中只るーで彼の意風と言ふ意氣ね
のガ袗元から水と灌せられと様ゐゾックリ襲つて
来さうと思ふと後方ゐをつくと現いれたる天狗
さるガ自已の肩と引摑んで否と言ふ程投つけ

とかう此方ハ天狗ぶつと知らず人の意路の邪广す
る奴了簡ゐらぬと疼さ我耐え起上りるガ〳〵踏
て居と雪踏で薙りたけ様と為ると又後方ゐ天
狗ガ現いれきつてん轉りと遣られとので惜い場
ざとん思ひゐガ〳〵命カ〳〵ガ逃て来とガ鞍馬山や
愛宕だうざと思つと〳〵北野の山ゐも駄ーい天
狗で自已ガお山と汚さうと為さりんざ〳〵岡焼餅
をやう孔さのガ若ー彼処で木の根と枕と出りけく

足ゐせへ
がらず
多くに
引裂

きて仕舞ヒア
後で堪えて足ると
天神さゐの様ゐ

正直ゐ神さゐの境内で何ど惚さからと言て女房持
の自己とお岩さんも亭主の有る身で居ゐぐら麻
麻炊うと為さから神慮ふ逆らひ天狗さまふ言ひ
附て為せと業うと思いれるのヨ夫ぢやァお岩さんも
苛い目ふ遇さらうゐア自己も其とゞ心配でなら
祐人うう身体の痛をゞふー能くゐるや否や知らね
顔をして往て見うう彼奴い却て何とも祐へのよ彼
と思ふと自己ぐらゐる者の惚る女い天狗さゐでも

矢張り宜くつて愛顧ゞあるのう知らん「詰ら祇へ事と言ふお前の郷所持の股の天狗さるぢゃア有めくし「まア聞て呉祇人其位る所まで漕附て居て癖い場所へ手ゞ届らぬとい殘念る訳何とう為様い有めへらエ三さん「夫りゃア訳い祇人とゞ「何様すりゃア宜らう「些と荒療治ゞ清兵衛の身体の治りを早く附て仕舞のサ「治りとい何様するのゞ「清兵衛い誰も知つて居る勤王家で十津川へ籠つゝ藤本鐵

石や幾野を伐さ平野國臣の連中ゐ違ひねへから確呼ゐと茂見届さうへ會津の守護職う桑名の所司代う又い見巡り組へ内々そのと茂訴へりゃア清兵衛い直さま生捕れ後いお岩さんゞ家の隊長ざから水性勝て志ぐい箱根や荒井の関所い有つても人目の関い拂つゝ同前何瀬人の女房を取るのゞらう先毒を食ふのと思いるけりゃア成ら祇人毒と食へだ皿までい神武以来極りの丈ゞ自已ゐ為せりゃア夫

が第一の近をち天狗さなふ投られる氣支いの無い
仕事と言ふのが「ウ成程こりやア上へざが勤王家の
連中ハ何れも暴ざから人ッ間違と島田左兵衛ざ
の目明の文吉を見さ様る目ふ遇せられるので空然
ちゝと事ハ出来ぬ守護職ら所司代ら見巡り組の人
ふ宜い手續きら無らうら「三新撰組ざと自已の居る一
軒おいて隣りの家ふ其隊長の女房の様る囲い者の
様る女が居るが世間を憚ると見えて極密々サ然が

手續きを附られ於く事ハ無らう其外ふハ心當り無
ど「寅新撰組の隊長ふら近藤勇ざらう彼の人を
大さう強いと言ふぢやア於へら「三元ハ農夫の子ざが
剣術が上手るので追々用ひられ出世して新撰組
の頭ふ成る位ざから鬼神ふも負ぬざらうが女ふ
掛ると矢張り愚弱りものとゑえる「寅何故ゝ「三今
話しさ自已の家の傍ふ居るお美弥さんが近藤と
什麼馴染の物語りと言ふのハ講譯師るら三日讀

切りの廣告札を掛ける長さで或者々〻聞くゞ鬼
の女房ゐや鬼神ゞ成との諺への通り素的滅法界
る女ぞぜ寅フン異う誉こんどッて當時ハ清兵衛の女
房後ゐ柊屋寅吉の妻とるゐお岩さゐ程ゐやァ往め
へ三お岩さんの御利益るら江戸の四ッ谷のお稲荷
さゐのハ聞て居るゞお前の信心のお岩さんハ何様
ゐ尊いゝまゞ知らねへ〻〻お美弥さんと比較とす
る譯ゐやァ往ゑ人のサ寅夫どゞそのお美弥さんとゝト

近藤との馴染ハ自己とお岩さんと馴染と様ゐ訳ゐハ
往めへ併後學の為ゞ聞て遣う話して見ゐせへ三箒棒
る手前の恍惚でも言やァあるへ聞の殘恩ゐ掛られ
て耐るりのう寅然ゞまァ話して見ゑ人自己の惣路の助
けゐ成る道往ゲ無いとも言れねへ三長いのと大人く
満尾まで聞て居るう寅斯言出してかゝゐやァ後へハ引
ね七日七夜掛つても宜からさァ話せ三まゝ一盃飲で
ゝゞ次で有る酒をぐいと飲ゐ猪口と寅吉ゐ指

偖近藤勇とお美弥との馴染の初まりハ併所や何くハ有漏覚えの角も有るから其了簡で聞く居給へッ武蔵國多摩川の中間ゑ登戸の渡しと二子の渡しの東の方ゑ大蔵村と呼ぶ木曾義仲の親帯刀先生義賢の墓の有る村ゲあつて其村へ林部左門と言ふ浪人者ゲ江戸くら引越し世帯を持さゲ左門ハ由ある武士るので軍学ハ山鹿流剣術ハ一刀流無念流真影流柳剛流の四流を極め山本勘助兵

とくくへ竹中半兵衛ときへ寄うと言ふ程の豪傑ゲ貧の病ひの其上ゑ真事の病ひゑまで取り着れ剥さへ女房と先達て一人の娘ゑ介抱さを微ゑ月日経送りけりで此猪口の酒とぐびと飲わ偖其林部左門の娘と言ふのゲ自己の一軒おいて隣りゑ居るお美弥と呼ぶ女で是と一口ゑ誉て仕舞と立ぢ芍薬居れぢ牡丹へ梅の匂ひと持せと別品愛敬ハ飛れて甘口ゑ見えね厳然しと代物男ゑ為れぢまつ自

已の様な風ッ今の年が廿二三ざらん大蔵村に居と
時に十七八の蓉の花ざが親と養ふ為に茶摘を養
蠶田植麥てき稲苅業の手傳るどして僅な日雇の
賃銀をのらひ漸煙りを立る仕合一日親左門の後
方へまいり病疲れる背中と徐々撫りるがら「美けの今日
い少しお顔色が宜い様で御座いまたらん蕎麦搔
を食つて御覧なさるお氣い御座いませんら名
主さるから新前の粉の大さら宜のと戴きま

と「天氣の穏ら故ら大分心持い宜が何も欲う無いか
ら夜食ふ粥でも拵らへて貰たら貧富い時のまわり
合せ銘々の耳朶ふ在と言ひるがら「イヤ何が耳朶
でも左様事明細でい困る蜆のお汁と食ふやうふ
貝撮んで話して貰ひて「夫ざから自巳が長いと
言て断ッさんざア併最そつと端折て演ドやう借そ
の娘い二十四孝喫驚ぎやうてんの親孝行で父左門
の肩と撫って居るところへ「イヤ御免なさん「お二人

しもお宅らへと動也〳〵這入り來りしい國定忠次の
子分の長脇指と呼ぶ博徒連で溝の口の紋三二子
の重六登戸の權八なり是と見るとお美弥い飛で出で
小〳〵い顔と知りらる者也夫々ふ會譯をると彼の
三人い口と揃へ「お前さんの親孝行と感ど昨日の
雨の下り鮎と今日玉川で漁やしとらら親父さんふ
上さいと思ひ持て来やしらと籠ふ入れたる鮎と出
されて元來此處らとらうみて名の聞へらる兇賴者ら

故其儘棄も置れ祢べ左門いお美弥ふ言ひ附て酒肴
るると取りふ遣んと為ると三人い押し止め「何々持の
儀るゝ我らゞ持参と為したりとて上り口ふ置し
一升樽と竹の皮包をと三ッ四ッさし出すい兼て此お
美弥ふ酌とさせ酒と飲ん目論見ふて来り者と
思れらり所で一盃次で異ん祢へッ

○第二十二回

寅マアサ飲のい止て其後編と話しの人ナ其處ぐお

美弥と相てゐ飲氣で来さのざゝ三人ゐがゝ押
かけの酒宴酔ゞ廻るとて拍子の相撲甚勺と唄ひ
うけ果いお美弥と捕えて三味線を弾て呉ろと言
ひ出すと左門い病ひの床ゐ臥ーても昔ー堅氣の
武士ざから藝者や茶屋女の真似いさせねと言
ふと三人ゞ愚摺り出ー「成程武士の娘ざから三
味線と弾て村の若いーものの相てと為ゐへいろとも
と夫るら左門先生い兵法剣術の師範を做さも

とゝるれど定て娘御ゐもご教授で有さらうから
一試合願ひゝひ我々い千葉周作の門人「イヤ拙者い
齋藤弥九郎の門人ゐゞ名乗りかけ食て掛る茂
風の柳ゐ請て居ても先頃名主へ客ゐ往きてい琴三
味線胡弓ゐゞと弾るゞゝ已さちゐい三味線を弾相て
とせねと言ふ茂怒りてゐれど承知せず「三味線を
弾て下せへるゞゝ婆女や女太夫同前ゐーゝゝ失敬
だゝと其替り剣術い何様でも彼様でも言ひ出ー

お美弥博
徒等と試合す

とかゝい願いずゐ置やせんと腕を捲り目を丸くして
左門が病床へ迫り掛り傍若無人の体を現しければ
左門も今いたゝく兼然れど御所望あらば娘ふ申
附未熟なれども剣術のお相てと致さすべし併験
証人無てい細ゝき勝負とけがさー此義い如何るさ
るゝやと聞き溝口の紋三膝と進め「夫い拙者が致
さん左「否其許ふていい御同伴の連るれば証ふ為
ーがと」「紋」「イヤ我らも男あり味方ありとて偏頗い

いさゝね「左」「然あるべきが當然なれども此方ふていい
請難ーとの争ひより遂ふ三人が血鉢とも投出す
べき勢ひふ至り」「時」「其」「験」証人ふい拙者が立んと
言ひゝ表の木戸押ー明徐々てふ入り来る人と左門親
子い又此奴らが仲間の悪僕るらんと見れば此程
左門ふ従ひ軍学と講ドふ来れる近藤勇るりけ
れば左門もお美弥も思いず胸を撫さりけり「自」
已も夫で胸を撫さが新撰組の頭の近藤勇が来

のざノ「左様さ〳〵」地獄で佛と言ふのハ其処いらぐるア
夫ゝら何様しさ自已ぐお岩さんふ惚られさ様ふ
近藤もお美弥と言ふ娘ふ惚られさゝ「マア急込ぎ
ふ聞ゝるへ夫ゝら弥本舞臺ぐ剣術の試合場と
るゝと初太刀お美弥の相てふ出さのぐ二子の重
六サ「左門ハ貧乏しても剣術の師範を為さかゝ
竹刀や面とてハ有さのゝ「左様さ〳〵其処で重六ぐ
長脇指仲間で誓古とゝさ無念流の腕前この娘

と徐々と撫倒ゝ和田美盛ぐ巴御前をせゝめゝ様ふ為
て遣らんと思ひゝふ立合ふぐ早いゝお美弥の為ふ
頭上とポコ〳〵と扣るをけれで「コハ残念ゝ竹刀を捨大
手と廣げて組ゝき掛るふ十分酒ふ酔されを足元蹌
踉つく所とお美弥ハてゝ身を変すと重六ハ自已ぐ
力ふ餘されて向ふへ動と倒れゝゝサ「夫ぢやァお美
弥ぐ大勝ざノ「知れさゝお前ぐ北野で投られゝ様ふ
重六ぐ轉げゝのざのノ「馬鹿と言ふるイ箆棒めエ

「為る」溝の口の紋三や登戸の權太が遺憾がり續いて出るけお美弥と立合ふとすると近藤勇が押し止め「三子の重六殿とやらと一試合為したれど既ふ其許さちの言ひぶんい立ち年往ぬ女の腕立い誉こる事ふも思い れ務が最たやお美弥さんいお引込こ有るべー其許ら達て試合が為したくば某が相手仕らんとて遂ふ近藤勇と紋三權太らの試合となりーかが勇い此者ら拔打懲し斯る行ひと為させと思ふより滅多矢多来ふ扣きのめしふで三人の博奕うちい頭と抱へて逃かへッとが彼奴らい仲間が多いから仕返しるんぞふ来る事も有うらとの用心ふて其頃近藤勇い武者修行の身の何處を宿と定め無れば博徒らの模様を見んがあ夫あり左門が家ふ足を止め左門の病の少も快き折い軍法を學び居うしが遠くて近きもの男女のあひだ阿美弥が近藤と好と男ぞと思ふと近藤

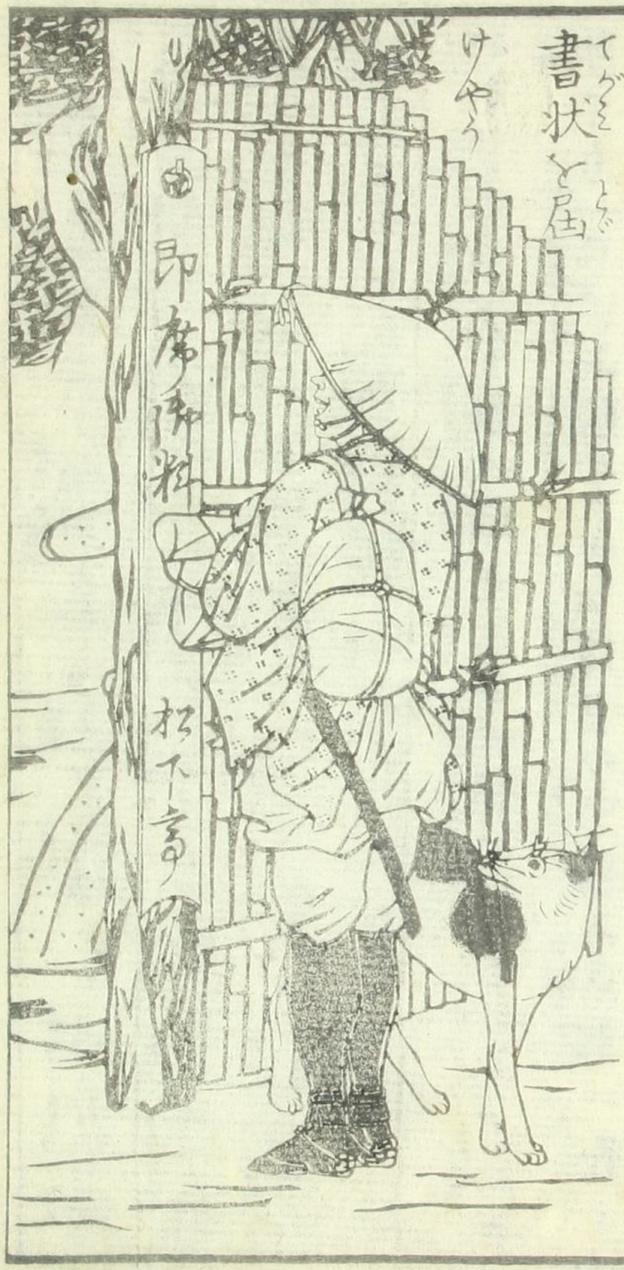
も又阿美弥と好き女ごと思ひ好き同志と言ふのゞ
から「ウンそうァ堪らねへ手も無く自巳とお岩さん
ご子「好きと好きとの引力て頓々好附て仕舞さい出
雲のお世話がひでも有うう彼是して居るうち林
部左門ゞ冥土へ轉籍やらかしたので無何時たり
の墮落夫婦とゝう夫ゝう近藤勇ゞこの地へ来て
新撰組の頭と成たので内々呼び上せ自巳の家の
一軒おいて隣へ置のさ然かゝ其勇と頼んで頼め

るへとい無ゞ誠と明すと飲きて愚頭を揑さとき
二三度勇ふ突を食せられさゝ其処で些頭を掻
む寅吉い鼻の先で「フンと言ひ「其処で頼をみ往を
ゞ出来後へのゝ併勤王家と言ひ立ふて奴さんを
生捕して仕舞と言ふ狂言い隨分筋ゞ通って居る
から何ゞゐて續き我尋ね出して彼奴めと破落
してと言ふ時三八目ゞさきとして袖を引ゐ寅吉
かゝへを見かへをゞ西國風の武士ゞ四五人連ふて居

り込む酒と肴を誂らへさり
○唄沒〻こと「ものこと」今は伐れ見染て捨めて遇こと時
やはひ夫るりに苧も解いで結び寝のトて供の浚ふ三味
線の文句も耳ふ入相の鐘ハ只さへ淋しきと微降る雨ふ
濕り捨ふ襟ふ頭ひ差いまく泪ふ潤む目とちらひ「煙
草ハ憂さ残忘れ草去来一ぷく呑うやと煙管へ煙
草をはぎるぐらふ梅ハ思ひふ塞がる胸と撫ふ已て
の獨語「ホンニふ隣りのふこの唄つてふ在の文句の通り

不斗ちゝ生麦の轉び寝かからひふ増し御恩が深くゐ
り一日ふ目ふ掛らぬさへ悲しく思つて居さとのヲ京
都へふ立ふ成てから泣て暮して来さ半年ふ顔ハ寫
真で見る斗り苛ッこい其中ふも人出入りの多い松
下亭ゐる京都ゝゝ下ッてふ在のふ客も有て折々ゝ
聞嬉しい噂ふ渡邊吉太郎と言ふ人ハ年こそ若け
ど此横濱の金武場といふ劍槍の誓古場の教授役
の中ゝゝ撰出されて京都見廻組ふ成さのぐらゝ京

都へ往ても矢張剣術の教授かさぐ肩と双べる者の無い早業ざぐ江戸ッこで男ぐ美し来て居るから女ぐ無暗ふ惚るので其方の剣おもつも骨ぐ折ると言ふ評ぢんぐ抔との話しもつとも吉太郎さんのお立の時何ぐ親類でも料理茶屋ゑどふ居てい何程其身を正しく為ても濡衣と着せられる事の無いとも言れね故江戸の家へ帰つて仕舞ませうと申したら夫へ一應道理で自已も夫なら安心ざぐ表向ふ未ぐ貰ひ請しと女房でい無し便り致為る譯ふ往ねらし矢張此處ふ居て呉る方ぐ宜左様為りやア使ひと被来と書状を届けやう



と勝手ゐ出来ると被仰さから夫も左様ごと思ひ家へ帰
らずゐ居こぶけ有て人の噂ゐ話しとも聞れ又繁く郵
便とも戴け此方らかゝる書ても上られるゝ夫い実ゐ
嬉しいけまごども早く京都へ御役宅ゲ出来サア引越して来
いと言て下さる様ゐ成さるゝ無嬉しいことで有うゲ夫ゐ
附ても一日〳〵ゐ騒々しさゲ増世の中殊ゐ京都い勤王
家とやらの諸藩士ゲ集るので横濱よりも切の張の
多くッて戦争の支度だらうと聞く若其様な事でも
始ると常々の御氣性と言ひ又人ゐ誉られて居るお身で
見れば後へハ引ず引もせず勝負い時の運とやら木曾義
仲や新田義貞の様な強い大将でさへ討死と為るかゝと
思ふと何程剣術ゐ達してお在でも銃砲斗り流行世
の中呼鳴いや〳〵考へれば考へる程悲しく成て来るだらう
忘れ様と為ると猶々思ひ出して泪ゐ瞼ゲ重くなり塞
いゲ顔とお居ると又お松さんやお竹さんゐ嬶られる
から些表でも見て氣と晴さうやト客の出入りの揚り

口ゐ出で植込の常盤木や飛石傳ひゐ成て居る門の外の往来と詠めて居ると旅人らしき風体の者ゞ来かり頻りゐ内と覗き入れ点頭ゐゞ這入来り「モシ姉さん松下亭と言ふ料理茶屋ハ此町内でい此方ゞらで御坐いますト聞れゐ梅ハ「イ手前一軒でございまス」「夫でハアノ私ハ京都ら参ったのゞゐ内ゐゐ梅さんト言ふゐ方ハゐ在るゝト言れてゐ梅ハ胸まゞ裏き思ハず知らず身と進め「イ吾侑ゞゐの梅でで坐い升貴君ハアノ渡邊さんらゐ往るすつと

春雨六上二十

「イ吉太郎様ゐゐ頼れ申しさので直ゐ江戸へ参るべき所一寸ゐ居物ゐ寄り升と左様ゐゝ貴嬢ゞゐ梅さんゝ調度宜つト油紙包をと下ー「ゐ手紙ハ中ゐ這入て居るとのゝちよツとゐ請取を願ひまストゐゐ梅ハ案事の最中のたより飛立ゞらゝの嬉しさゐ奥へ忙々駈こて請取と書持来り茶煙草盆るゞ出ーるゞゝ「京都ハ大さゝ騒ゞいと噂と致ーますゞアノ真正でゞざいませうゝ「此方で申す様る物でハ御坐いません渡辺さゐ抔ハ晝夜

着込の鎖繻絆袋附どうーで鉾鐵や武者草鞋と
お放しるさる様る事へ無い騒ぎ取ヨけ長州侯の
勢ひが盛大で松を折て萩を植るなどて言ふ流行
辞と子供るんぞが唄ひ歩行位ざから何瀬戦争
ふ為らずふん濟ますまへイヤ是ヨやァ雨へ止んざが
暗く成て來さと言ふ時天主堂の時計チャンチャアン

春雨文庫第六編巻之上　終

010190508302